

「幻の花園」 ～息子への夢～

三三回生 近藤 節夫

丁度三年前（一九九一年）の秋、私たちは朦朧と「花園」を夢見ていた。

私の高校時代は、ゲームでも選手にも、負けがつき、「花園」は、まさしく「夢のまた、夢」であった。

それが、「花園出場」はおろか、ひよっとすると「全国制覇」も夢ではないと、監督、コーチはもちろん、学校関係者にまで、大きな期待を抱かせるに至った息子たち高校チームの活躍と、それに踊らされた周辺の大人たちの興奮ぶりは、いま思うといささか常軌を逸っていた。

しかし、当時は、それが当り前と思っていた。「花園」症候群と云っても良かった。親として三年間、中学時代を含めると六年間の苦労と希望の総決算が目前に迫っていたのだ。

チームは息子の一年生の時に、前年度に続き「花園」へ出場した。翌年息子は、スクラムハーフのリザーブとしてベンチ入りしたが、決勝戦で不運にも逆転負けを喫してしまい、三年連続「花園出場」は成らなかった。テレビでも放映され悔し涙を流した息子たちは、一転、新生ファイティーンとしてその日のうちに健気な決意を示した。翌年の雪辱を誓い、厳しく、苦しい練習に耐え抜くことを仲間たちと固く約束しあったのだ。

チーム史上最強と噂された重量FWに、俊足で当たりの強いBKを擁した新チームは、素早く、新人戦で実力の片鱗を見せつけ、楽々と優勝してしまった。

春に入り、監督を大怪我で欠く不測の事態に直面し、逞しい子どもたちの気持ちにもさすがに動揺が見られ、チーム状態は一時期低迷を続けた。

しかし、関東大会から北海道選抜大会を経て、真夏の過酷な草津、菅平合宿に入る頃には、チームの状態も漸く上向きになった。

この間、私たち夫婦も他の親たちと同様、合宿や遠征試合に同行して、監督、コーチへの気配りに始まり、怪我人の搬送、車の運転、グラウンド整備等雑務に献身的に協力した。ほとんどの父親が、仕事を犠牲にして菅平へ駆けつけた。親同士も子ども以上に交流を深め、助けあい、ともに連帯感でチームを裏方として支えた。なかでも、自身、花園優勝経験を持ち、元日本代表としても活躍したYさんは、SOの息子に戦略を授け、精力的に動き回り、私たちも終始尊敬の眼差で見守っていた。

草津では、チームを基礎から立て直し、菅平では、意欲的に強豪校と対戦カードを組み、秋の本番へ向け、徐々に調子を仕上げて行った。炎天下に数多くの練習試合を戦う過程でチーム力の向上は、個々のスキルの面、総合的なゲームメイキングの点でチームとしてまとまりを見せ、成果は顕著に現れてきた。

前年度優勝校天理高を破り、大阪工大高、伏見工、日川高、西陵商等、花園常連校とも互角以上の勝負をした。

「いけるー」との確信を抱いて、六年目の菅平合宿に別れを告げた。

再び八幡山に戻り、連日久我山高と公式戦さながらの激しい練習試合を戦った。このプロセスに勝利への確かな手応えを感じた。マスコミは、チームを優勝候補の一角に挙げてくれた。くじ運にも恵まれ、「花園」は、最早や射程圏内にあり、今にも手の届くところにあった。

有頂天になった一部の父兄のなかには、息子たちが新装成った花園ラグビー場を堂々行進する晴れ姿を脳裏に描いたり、花園大会で当たる対戦校を予想したり、そのボルテージは上る一方であった。今では笑い話にしか過ぎないが、フィーバーは止まるところを知らず早手回しに「花園出場」に備えて、宿舎、バス、グラウンドを確保するという冗談ともつかぬエピソードもあった。

しかし、意外なところに落とし穴があった。予選に入り予想もしなかった怪我人の続出に思いがけず、慌てふためいた。己んぬる哉、わが息子も、準々決勝前日、右手首を捻挫してしまった。フルバックの怪我の回復も絶望的であった。キャプテンの膝の具合も思わしくなかった。選手たちより周囲が浮足立った。「もしかすると……とあせりと云い知れぬ不安がよぎった。

休みになるとグラウンドにかけつける親の気持も落ち着かない。時間だけが、無情に経過していった。

息子たちの怪我の回復は、遂に間に合わなかった。

正規のスクラムハーフとフルバックを欠き、満身創痍のチームは健闘したが、準決勝で必ずと敗れてしまった。包帯姿の息子は、スタンドで切歯扼腕の思いで戦況を見つめているより成す術はなかった。試合に出られなかった仲間たちと必死の応援も失地を回復

できなかった。

「花園の夢」は、儚く潰えた。仲間たち、父兄、監督、コーチ、先輩、学校関係者、その周囲には重苦しい空気が流れ、寂として声もなかった。三年経った今も、監督はあの時、何故負けたのか分らないと云う。

その年、全国優勝を飾った啓光学園には、息子が一年生の時に菅平で圧勝した。準優勝校久我山高には、五分以上の星を残した。

思えば、残念の極みである。掌中に収めかけた「花園」だっただけに逸った珠は大きい。

あれから三年、当時の仲間とは、息子はいまも親しくつきあっている。名門大学で頑張る仲間たちや、地方大学で力を発揮する仲間たち、鍛え抜いた肉体は、眩いほど逞しい。楕円形のボールで結ばれた友情のキズナは固い。

息子はいま、関東大学リーグ三部校で、引き続きスクラムハーフとしてプレイしている。今度は監督やコーチに厳しく指導されることなしに、自分たちの自主的な計画に基づいたトレーニングで大学ラグビーをエンジョイしている。

私たち夫婦は、時折、当時の仲間の父兄と会っては、ラグビーの、菅平の、息子たちの懐かしい昔話？に止め処もない。つい、愚痴が出る。

「あの時、花園に行っていれば……。」

でも、息子とその仲間たちには、暫しの間私自身にはとても想像もできなかった「花園」の素晴らしい夢を見せて貰った。それだけでも充分すぎると思う。

いま、わが家から熱狂的なフィーバーは去った。しかし、ラグビーは、いまもわが家の「カスガイ」である。